

202

2344

津山郷土館

史 跡 院 庄 館 跡  
発 掘 調 査 報 告



津 山 市 教 育 委 員 会

1974. 3.

## 序

国指定史跡「院庄館跡」は、鎌倉から室町時代にかけての美作守護職の居館跡と推定されている遺跡ですが、櫻樹を削って十字の詩を記した児島高德の伝承と共に、多くの人びとに親しまれてきました。

「方八十間」といわれる広大な館跡は、長い間草地として保存されていたようですが、寛政の頃大部分が水田となり、明治2年には後醍醐天皇と児島高德を合祀する作楽神社がほぼその中央部に造成されました。続いて太平洋戦争終戦の前後、神社周辺を埋立てて全域が境内となり、池や周囲に堀が設けられて今日に至っています。このように一部に変更が加えられましたが、東・西・北の三方には延長約500mにわたって往時の土塁が現存し、今尚昔の面影をしのばせています。

したがってこの遺跡は、当地方としては貴重な文化財で、市としても「宗教法人作楽神社」と協力して保護保存に努めてまいりましたが、更にその万全を期するため、管理の在り方を再検討し、史跡公園として環境を整備することになりました。そのため教育委員会では「院庄館跡保存整備委員会」を設け、地元及び神社側代表、市文化財保護委員会、学識経験者から12名の委員を委嘱し保存整備の基本方針について協議を重ねました。

その結果、整備の方向を見定めるため、文化庁の許可を受け県教育委員会の指導によって土塁等のトレンチ調査を行うこととし、調査員には市文化財保護委員渡辺健治、院庄小学校教諭土居徹の両氏をわずらわし、市文化財保護主査河本清が現地にあたって12箇所の調査を実施しました。

この報告書はその結果をまとめたものですが、遺跡地は明治2年以降神社の築造並びに堀・池等の造成による破壊を除き、他は保存の状態がおおむね良好であることが明らかになりました。今後はこの調査結果に基づいて整備を進める予定ですが、ここに報告書の刊行にあたり、関係各位のご苦勞に深く感謝申し上げますと共に、将来の本格的な調査に期待し、皆様のご指導をお願いする次第です。

昭和49年3月

津山市教育委員会

教育長 木村岩治

### 例 言

1. この報告書は、津山市教育委員会によって行なわれた。院庄館跡整備事業計画に伴う発掘調査報告である。
2. 発掘調査にあたっては、市文化財保護委員渡辺健治、院庄小学校教諭土居徹の両氏を調査員として依頼し、調査について検討、評価を受けた。
3. 調査は河本清が担当し、須江尚志、漢哲夫、春名啓介、国貞圭也の各位の協力をえた。
4. 切絵図作成にあたっては神尾齊氏の協力をえた。
5. この報告書の編集、執筆は河本がおこなった。
6. 本書で用いた高さの数値は、海抜絶対高である。

## 目 次

I	位置と環境	(1) 頁
II	館跡の現状	(1) 頁
III	調査の経過	(2) 頁
IV	調査の概要	(2) 頁
	遺 構	
	遺 物	
V	まとめにかえて	(6) 頁

## 図 目 次

第1図	トレンチ配置図	(製図国貞)
第2図	切 絵 図	(作成・神尾 河本、製図・国貞)
第3図	土 塁 (T 3)	(実測製図・河本)
第4図	土 塁 (T 4.6)	(実測・国貞、製図・河本)
第5図	土 塁 (T 2.10)	(実測・国貞、製図・河本)
第6図	井 戸	(実測製図・河本)
第7図	柱 穴	(実測・河本 国貞、製図・河本)
第8図	遺 物	(実測製図・河本)
第9図	遺 物	(実測製図・河本)

## I 位置と環境

院庄館跡は岡山県津山市神戸字御館 443 番地に所在する。津山市街地の西に南北に長く伸びた院庄平野のほぼ中心に立地する。この院庄平野は、吉井川とその支流である香香美川、久米川によって形成された沖積平野である、中国山地に源を發し、南流した吉井川は院庄平野の南に聳える嵯峨山山塊によって鋭く曲折し、流れを東にかえて津山市街地をぬけている。その為、この付近においては、古くから河道敷を変えており、少なくとも現河道西の久米町分にその痕跡を残すもの、或は、館跡西南縁を削り、南東にその痕跡するものがみられる。したがって、館跡がのっている地は、自然堤防状の地形を呈しているが館創設以後はかなり安定した模様である。地元古老の話によると、明治 22 年、同 23 年春の大洪水においても、この地前面まで水没したが、この地は水没からまぬがれたとのことである。

平野部周辺は、中国山地から南に派生した低丘陵がのびている。これら丘陵は一般に海拔 130 ~ 140 m 前後の舌状丘陵からなっているが、ただ、北東に遠望される神楽尾山(山城)、南の嵯峨山(山城)、神南備山等はそれらを抜きんでて高くそびえている。こうした地理環境にある院庄の地は、古代陸路においては、山陽と山陰を結ぶ分岐点の地に位置している。即ち、吉井川筋に北上して人形峠を越えれば因幡国に、西行して勝山、新庄を越えれば出雲国に達する。また、水上交通路をみれば、吉井川は近世においては、山間の津山盆地と瀬戸内海を結ぶ主要な交通路として、高瀬舟の運行が絶えることがなかったのである。おそらく、古代、中世においても物資の流通路として、或は、文化の導入路として、重要な動脈となっていたに違いない。院庄館跡はこういった内陸交通路の拠点とした位置に立地している。古代律令制の施行により美作国府が津山市街地の西北高台に置かれたのに対して、中世以後江戸時代までこの地が州府として、中心的な存在をしめるのもこうした交通の有利さと、広大な平野から上る農業生産力＝農民を直接支配できる位置にあったからに相違ない。

## II 館跡の現状

院庄館跡は、明治 2 年に後醍醐天皇を祭神とし、児島高德を配祀として作樂神社が建てられ<sup>(1)</sup>、その後、大正年間に改築されている。第 2 次世界大戦末期には学生、生徒の動員によって現在みられる神社周辺の堀が掘られ、戦後には、神社北東に池を築くなど神社として整備されてきたのである。その間、大正 11 年 3 月 8 日に国指定史跡として指定されている。今回の調査によって館跡は史跡地のみならず周辺の水田地にも広がっていることが地籍名によって明らかとなった。その範囲は東西約 250 m、南北約 300 m を最小としている。しかし、この周辺は昭和 49 年に開通予定されている中国縦貫自動車道の建設とともに、急激に変貌され、工場の建設、宅地の造成等建設の騒音が絶えない状況にある。

### III 調査の経過

本調査は、史跡院庄館跡を史跡公園として整備するために、その基礎資料を得るためのものとして実施したものである。調査は、土塁の残存状態と構築時期をつかむこと、館内の遺構の保存状態の確認を主目的として、土塁に5ヶ所館内に7ヶ所、計12ヶ所にトレンチ（巾、長さとも一定しない）を設定し実施した。調査は昭和48年11月21日に開始し、昭和49年3月12日に終了した。その間、調査委員会2回、整備委員会1回、市文化財保護委員会1回、現地説明会1回、総務文教委員会視察1回等の主な行事を開催した。調査にあたっては、調査委員から多くの指導、助言を受けた。また、作業員雇用にあたっては、院庄連合町内会長小椋五作氏に、当初発掘調査事務所として公民館を心よく借用くださった院庄公民館長河田 示氏、調査事務所用の飲料水を提供くださった神社関係の方々、特に、十数年ぶりの大雪にみまわれるという厳しい寒さの中で、われわれと共に苦勞下さった作業員の方々等多くの方にお世話になり、無事調査を完了することが出来た。記して感謝したい。

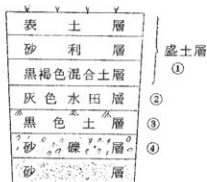
また、奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部長坪井清足氏、同計測主任牛川嘉幸氏には、熊山遺跡調査会で来岡の折、ご無理をお願いして現地指導を受けた。合せて感謝する次第である。

### IV 調査の概要

#### 1. 基本的層序

調査により確認された館跡内の土層の基本的層序を模式的に記せば図のとおりである。盛土層①は地点によってかなりの違いが見られ、浅い所は約20cm、深い所で約50cm前後である。この盛土層は神社建築にかかる整備の盛土である。盛土直下には、灰色水田層がみられる。この水田層は江戸時代頃に水田として使用されていたものと推定される。この直下の酸化鉄層と黒色土層から多くの遺物が検出されている。黒色土層はT-1以外の調査地で確認されている。この面が館期の生活面と推察される。黒色土以下は無遺物層となり、暫時砂礫層から砂層に変化する。

土層模式図



#### 2. 遺構

土塁、T 2, 3, 4, 6 により土塁を直角に切断した。その結果、T 2 を除く各ト

レンチに於て黒色土直上に約巾2m～5m×高さ0.75m～1.9mの盛土がみられる。この盛土は新旧の2層に大別される。古い時期の盛土の敷値は表のとおりであるが、これが館期の土塁の残存を示すものと判断した。これら土塁盛土の状態は地点により若干異なるので以下各トレンチごとに記述する。

トレンチ	巾	高さ
T-10	47	450
T-2	40	270
T-3	100	530
T-4	40	185
T-6	55	380

(cm)

**T-3** 土塁基盤層は固い灰褐色土よりなり、その上に褐色土、砂礫混合土を盛っている。最下層の基盤層は非常に固く、掘り下げる途中に於て唐轍もなかなか立たない状態であり、意識的に固められた可能性が強い。この土層内には、須恵器、磁器の他鉄ぞくも含んでいて、所謂、整地層の状態を表わしている。土器類の散布は土層下部の黒色土層面に接するか、やや離れた面に多くみられる。トレンチ東側の盛土斜面にかかる部分に於て、この灰褐色土層から成長したとも思われる松根がみられ、或は、灰褐色土面での一定期間の生活も考えられたが、この層の上面と次の盛土との間は、そういった状況はみられず一気に築成された状態を看取されるので、松根については、盛土築成後成長したか、植樹されたものと推察した。この古い時期の土塁の上は、円礫による高さ08mの盛りがみられる。これは戦後の神社整備による池構築のための掘り上げ土を盛ったものである。

**T-4, 6** 灰褐色土または暗灰色土による土塁残存跡を看取される。両端、高さとも削平されているが、その痕跡は明瞭である。

**T-10** 黒色土直上に暗褐色土よりなる1層の盛土によって土塁が築かれている。この盛土には須恵器(糸切底)を包含している。

**T-2** 黒色土と盛土の間に2層に大別される灰褐色土がみられる。土塁盛はこの土層上面に築成されている。その上盛土は、他の地点ではみられない黄褐色土と黒色土の混合土1層によって築かれているのみならず、この盛土は固くしめられた状態ではなく、ただ積み上げたといった状態を呈している。盛土のはじまる面のレベルは他のトレンチのそれと一致するのであるが、或は新しい時期に築成されたものかとも考えられる。即ち、貞享5年(1688)国主森長成の時、長尾隼人勝明が石碑を建て、後醍醐天皇と児島高德を顕彰している。この時に旧街道より石碑までを直線に新道(参道)を開いているのであるが<sup>(2)</sup>頂度、T-2の東部分が、この道筋にあっている。今この石碑の位置に立って土塁の南北センターを狙うとT-2部分の土塁は完全に西にずれている。しかも現存している土塁の状況もこの部分だけ低平である。こうしたことからみても、検出された土塁は江戸時代に改築された可能性が強い。

以上、各トレンチに於ける土塁の状態をみたが、これら土塁は、T-2を除いて基盤層に平安末から鎌倉期の遺物を含んでいるので、館存続期ではあってもやや遅れて構築されたものと考えられる。

これらの古い時期の土塁はさらに盛土され、現在の土塁となっている。

井戸、T-1に於て発見されたものである。掘方は2.2m×2.4mの隅丸方形を基本としているが、東に長方形の突出が2ヶ所みられる不整形なものである。時間と経費の関係で完掘はできなかった。検出の段階では掘方内に児頭大の河原石の広がりを中心に向って落ち込んだ状態をみせていた。これら落ち込み石を取り上げてゆく中で井戸枠を確認することができた。口径約60cm、深さ1.3m以上の井戸である。上部は河原石による円形の枠組をなしているが、その残存状態は良好ではない。井戸下部は推定一辺80cmの方形の一枚横板による枠組である。板材は厚さ約2cm、巾約10cmで内面にやや張り出したものである。西北角における部分的な確認では、隅柱はなく、横板の裏に溜板とでも呼ぶ2枚の板材を縦に打ち込んで井戸枠角を固定している。井筒は確認されていない。掘り下げ途中で於て、2ヶ所の部位で井戸穴を覆うかの状態で板材が横たわっていた。上部の横板は、井戸底部を確認するためにかなり無理な状態で取り上げたが、下部のそれは検出の状態で保存した。これらの用途を確認するためには井戸上部を壊し、掘方にそって検出されなければならない。井戸内からの出土遺物は、甕、土師質摺鉢、瓦質土鍋、墨書木片、箸状木整品等である。

柱穴 柱穴はT-2,5で各1個、T-9で5個、計7個の検出をみたにすぎない。しかし、限定されたトレンチ調査ではこの程度でやむをえないと考える。むしろ、土層等から判断すれば、面的調査を実施すればかなりまとまった建物の存在が予想される。検出された柱穴は館期の基盤層となっている黒色土層を切り込んでいる。径約35cm、深さ20cm前後のもので掘立柱の建物の存在を裏付けている。T-9に於ては、現井戸をとり込む状況で検出され、井戸の上層としての建物を推定したが、この井戸は新しく構築されたもので建物とは関係しないことが井戸の水抜きによってはっきりした。

堀 神社周辺のトレンチ(5.11.12)に検出されたのである。明治2年神社築造期に掘られたもので館跡とは関係しない。ただ、墨書磁器はT-11の堀底から発見されたのであるが、造営時の偶然の落ち込みと考えられる。

### 3. 遺物

出土した遺物の量は多くないが、須恵器、陶磁器、土鍋、鉄釘、鉄鉢、木器等内容は豊富である。遺構に伴うものとしては、井戸出土のもののみであるが、全般的に調査区の全域から出土した。これらの大部分は先に記したように、黒色土に接する面からの検出が多い。

須恵器 不、甕、小皿等が出土している。不は全て糸切底で高台のついたものはみられない。復原できるもので口径15.3cm、高さ4.3cmを計る。器型は身

の下部が丸く張り出して底部との境に稜をなさないものと、自然に立ち上るものとがみられる。小皿は径のわりに浅く切糸痕はみられない。坏、小皿とも灰色を基調とし焼成は堅緻である。

甕は口縁が玉縁をなしているものと、外反しながら自然に薄く口縁端部を結ぶものとがある。玉縁をなす甕は肩部に整形時の指頭圧痕をとどめ、内面は削り後、なで仕上をしている。甕胴部片は表面に格子目の叩きが顕著なものが多い。それらの内面は、刷毛目仕上を縦横に残すものと、青海波の叩きを消しているものとがみられる。所謂、灰色の須恵器と淡褐色の上師質の色調ではあるが両く焼き締ったものとがある。

須恵器ではないが、瓦質甕片が2片ある。

#### 陶磁器

青磁、青白磁で器型を推察されるものは、全て碗である。口縁部は玉縁状に太く帯をなすものと、自然に結ばれるものとがある。底部は高台になるものと上げ底となるものとがみられる。上げ底になるものは、底部径4cmを計る。胎土は灰色ないし、白灰色を呈し、釉は内面身下部まで、外面は身部中央をやや下った所までかけている。墨書磁器は、碗底部外面に墨書されている。総数8点

出土。その他、高麗青磁<sup>(3)</sup>とみられる1点、天目茶碗1点、古織部<sup>(4)</sup>(器形不明)1点、常滑焼甕片1点、備前焼摺鉢1点、初期伊万里<sup>(5)</sup>2点等がみられる。

土鍋、土師質と瓦質のものがあり、胴部を復原できるものはない。煤の付着をのこしているものもある。

土師質摺鉢、口縁外面をやや丸みをもたせて斜めに切ったもので、摺目はまばらである淡褐色を呈し、一見やわらかい感じがするが焼成はよい。

釘、T-1.5を中心として7本出土した全て角釘で、頭部は折り曲げている。鉄ぞく、T-3で出土したものである。片刃矢式鉄ぞくで破損部付近にマチ痕とも考えられるくせをもっているが、定かでない。

木器 箸状木製品、断面7角をなし先端が細くなっている。径0.5cm、現長9.4cmを計る。墨書木片、現長10cm、厚さ0.6cmの木札状のもので2ヶ所に墨書痕をみせているが判読不能である。

これら遺物は、平安末期から室町時代にかかるものが大部分である。

注1. 矢吹正則、「院荘作楽香」明治38年1月。作楽神社保存事務所

注2. 注1に同じ。

注3. 県教委文化課、伊藤見氏の教示による。

注4. 注3に同じ。

注5. 津山みのり学園勤務、植月壮介氏の教示による。

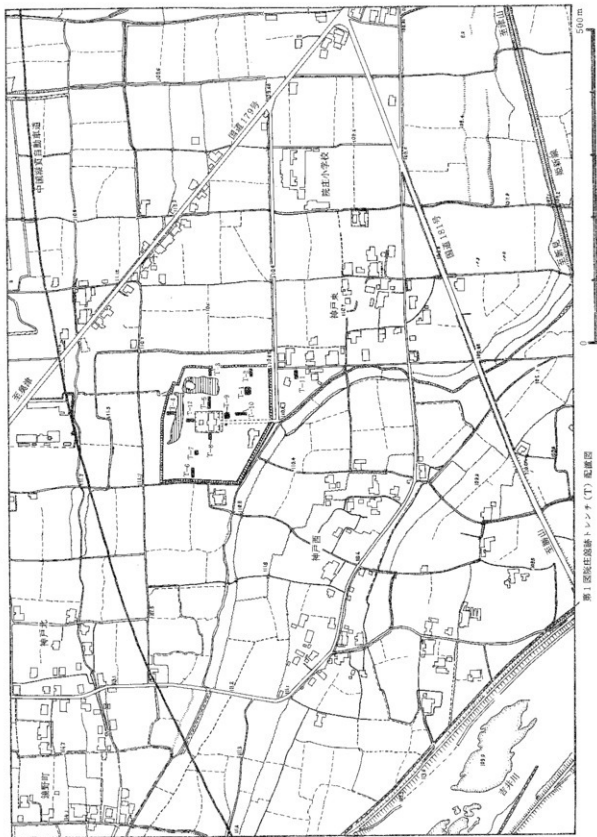
注6. 県教委文化課、栗野克己氏の教示による。



## V まとめにかえて

おわりに調査員会議により結論づけられた遺跡及び遺構の評価によりまとめとしたい。

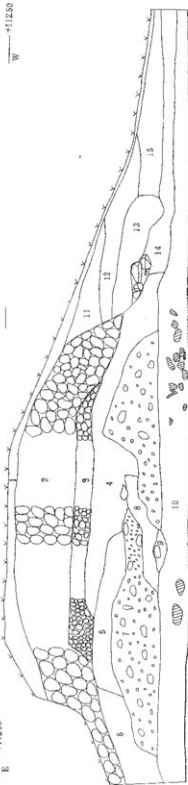
1. 調査地のはほぼ全域にみられる黒色土層は、鎌倉時代かそれを大きく下らない時代の生活面である。即ち、館期の生活面としてよいであろう。
2. トレンチ1の井戸の時期は鎌倉時代のものであろう。
3. トレンチ9の神社拜殿前に検出された柱穴群は、館期の柱穴として結論づけられる。したがって、この付近が館建物の密集する地区であろう。
4. 土塁の構築された時期は、鎌倉時代以降で館存続期に築成されたものである。
5. 本館跡は従来から水田、畑等によって、土塁以外はかなり破壊されているであろう等の見方もあったが、調査の結果、遺跡地の破壊は明治2年以降、神社の築造ならびに整備に伴う堀、池等によるもので、それ以外は大きく破壊されていないことが判明された。
6. 周辺の切絵図を検討するに、史跡以外の東、西、北側に「御館」、「御館掘り」、「掘り」等の地名がみられる。このことはもとの「館」は、史跡以外に広がるものと推定され、その範囲は東西250m、南北300m以上である。



第1 図 神田町神田東トランプ (T) 配置図



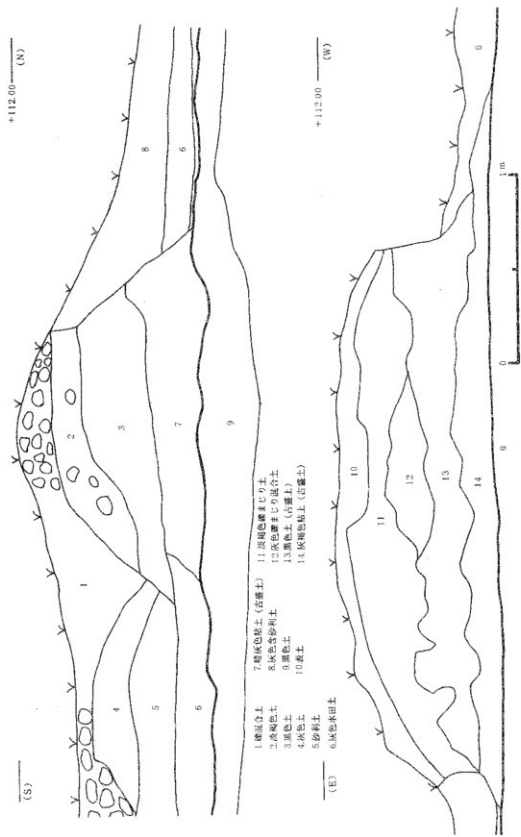
E — +11250



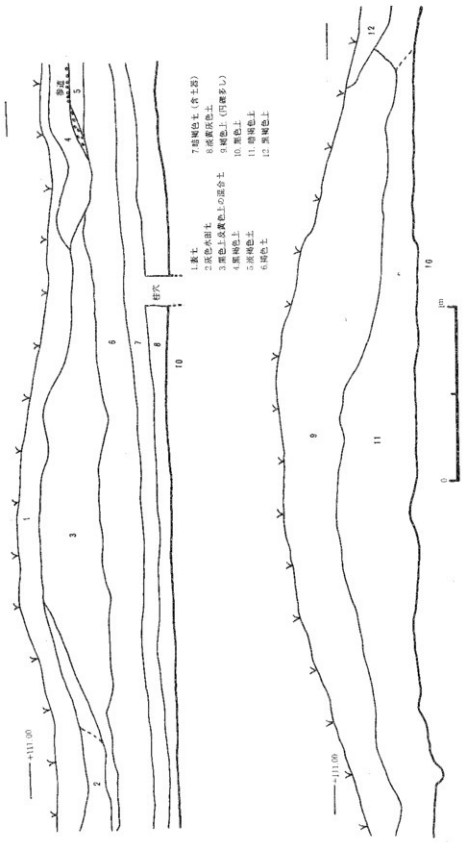
- 1 黄土 6 褐色土  
2 田礫 7 砂礫土 11 暗褐色土  
3 小円礫 8 灰色粘土 12 灰色砂まじり土  
4 褐色土 9 灰色粘土 13 黒褐色土  
5 黒褐色土 10 灰色水田土 14 灰色粘土  
15 灰色粘土

第3段土層断面図 (T-3層位)

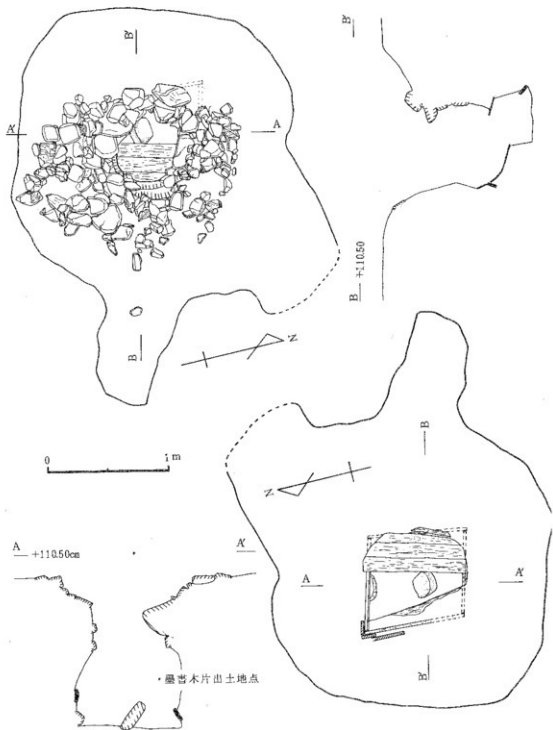
W — +11250



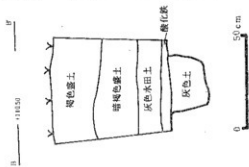
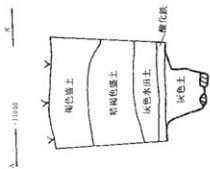
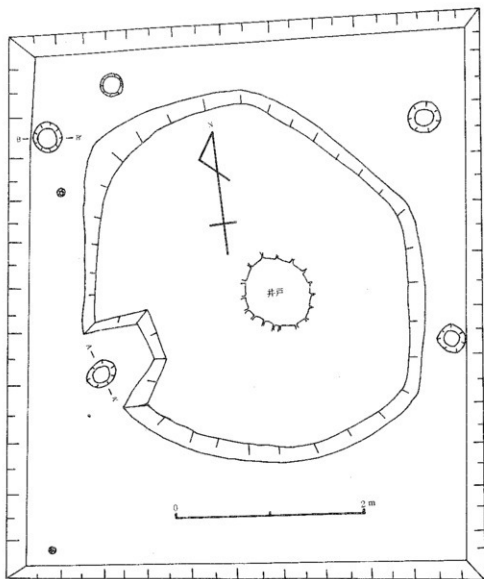
第4図土質断面図 (上, T-4, 西壁, 下, T-6, 南壁)



第5同上図 (上2, FT10)

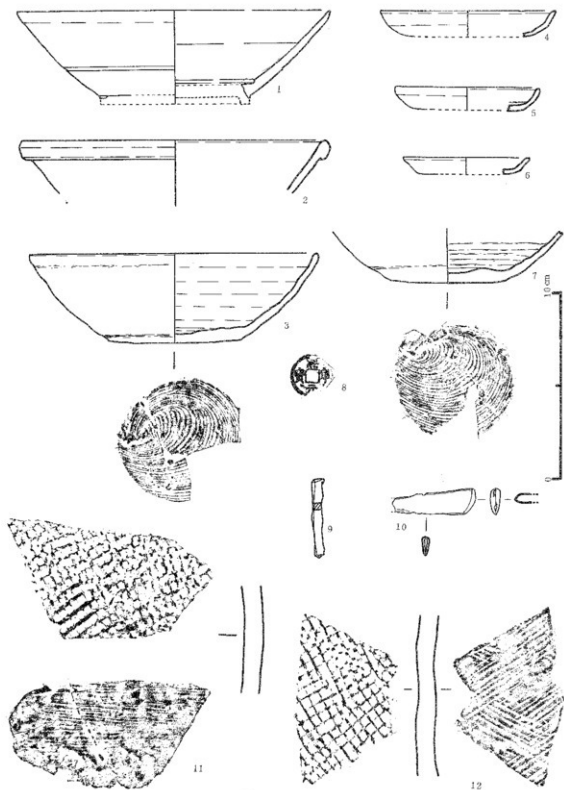


第6图井戸平面图、断面图（右下底部木梯复原图）



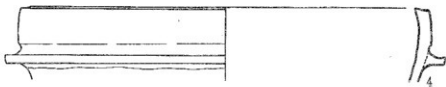
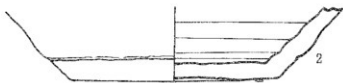
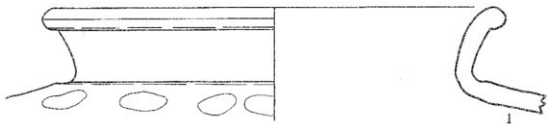
第7岡柱穴、平面図、断面図





第8图 器物实例图

青磁(1,2) 环(3,7) 小皿(4,5,6) 陶家元室(8)  
铁钉(9) 铁器(1,10) 器(11,12)



第9 図遺物実測図

甕 (1.2) 土鍋 (3.4.5) 土師質指鉢 (6)

0 1.0 cm

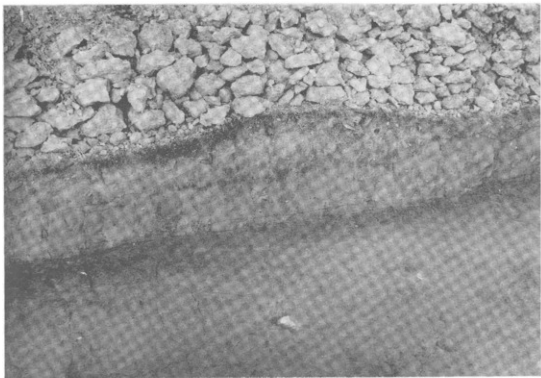




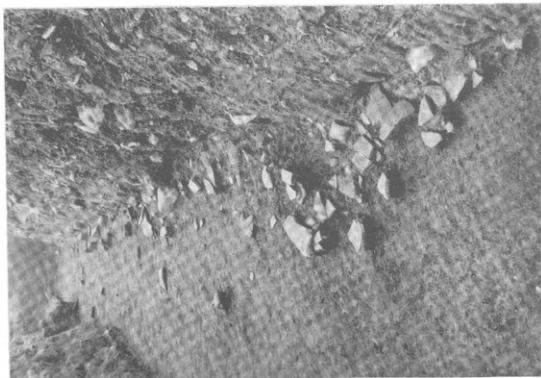
1. 院庄館跡遠景（西北から）



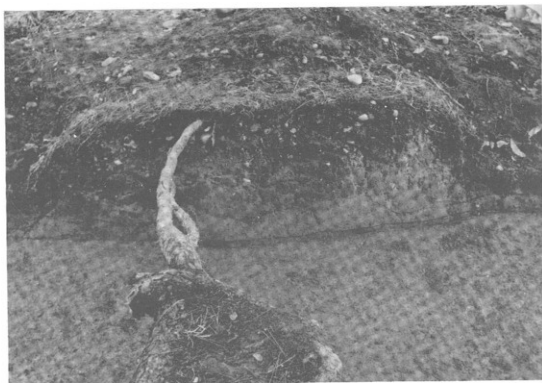
2. 現地説明会



土塁 (T2南から)



土塁 (T3遺物出土状態、西から)

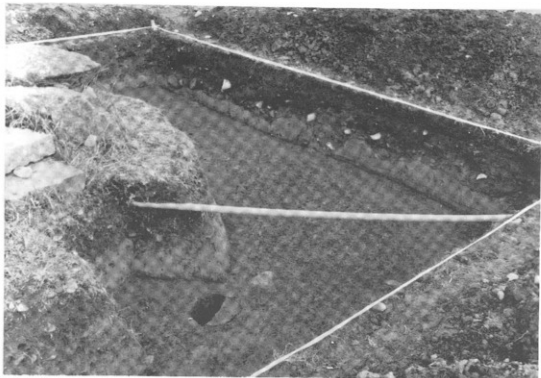


土層 (T6.北から)

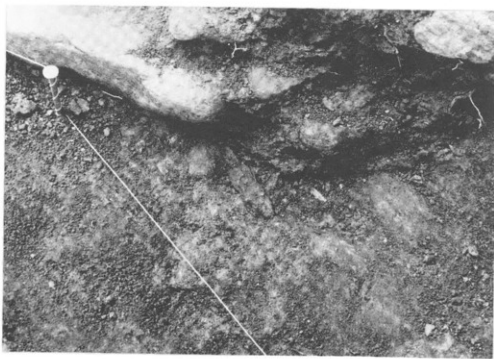


図版 3

トレンチ 5 (手前の掘は神社整備に伴うもの。東から)

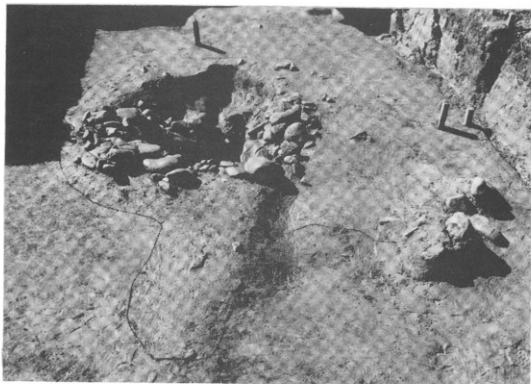


柱穴 (T 9. 西から)

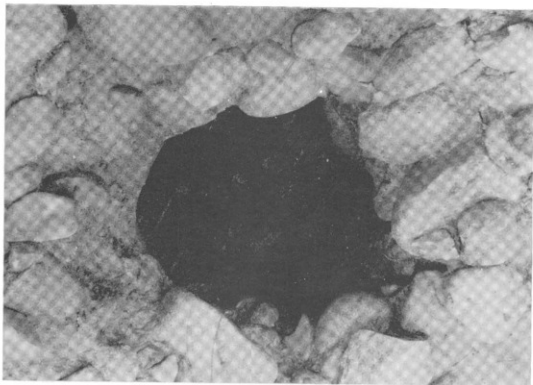


図版 4

鉄鏝出土状態 (T 3)

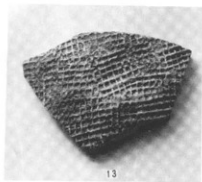
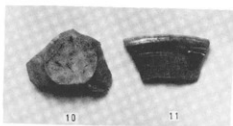
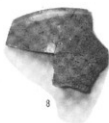
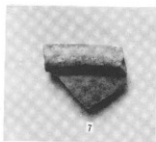
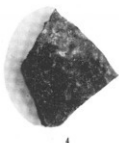
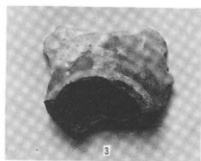
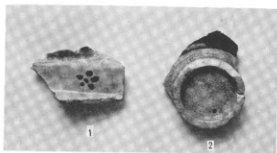


井戸全景 (T1 東から)



井戸底 (北から)





図版6 遺物  
 1. 織部 2. 天目茶碗 3. 高麗青磁 4. 常滑 5. 漆書木片 6. 箸状木製品  
 7. 8. 10. 11. 磁器 9. 漆器 12. 鉄舌く 13. 瓦質土器